

ニック・アダムズと「伝道の書」：ヘミングウェイ 作品における宗教観再考

高野，泰志
九州大学大学院人文科学研究院文学部門：准教授：アメリカ文学

<https://doi.org/10.15017/16879>

出版情報：文藝研究. 107, pp.68-86, 2010-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：



ニック・アダムズと「伝道の書」

——ヘミングウェイ作品における宗教観再考

高 野 泰 志

イントロダクション

「インディアン・キャンプ」(“Indian Camp,” 1925) は、アーネスト・ヘミングウェイの半自伝的登場人物ニック・アダムズを主人公とした一連の短編群の最初の作品である。ニックの父親ヘンリー・アダムズ医師が、ネイティヴ・アメリカンの女性に麻酔もかけずにジャックナイフと釣り用の糸で帝王切開手術を行う物語であり、手術後に夫は妻のあげる悲鳴に耐えきれずに剃刀で首をかき切って自殺してしまう。その自殺したネイティヴ・アメリカンの姿をともに目撃したニックは、物語の最後に父親のこぐボートの中で、「自分は決して死なない」と確信する。作品内容と矛盾するようなニックのこの確信は、これまで多くの研究者がさまざまな説明を試みてきた。大半の研究者は「インディアン・キャンプ」をニックのイニシエーションの物語と読み、ニックのイニシエーションが成功したのか、失敗したのか、という点を中心に議論している¹。

本論は出版直前に「インディアン・キャンプ」から削除された原稿にもとづき、これら先行研究とは異なる新たな観点から作品を読み直す試みである。ヘミングウェイが原稿の前半部分を削除することで、結果的に物語はニックのイニシエーションを描いているように見えるが、実はその背後には宗教をめぐる家族の問題が潜んでいるのである。従来のヘミングウェイ研究では、ヘミングウェイの信仰心自体が考慮されることがほとんどなく、作品の持つ宗教性に対して関心が向けられてこなかった。数少ない例外としては、オークパーク時代

のヘミングウェイの宗教を扱ったラリー・E・グライムズ (Larry E. Grimes) の研究²と、ヨーロッパでカトリックに改宗したあとの、カトリシズムに関するH・R・ストーンバック (H. R. Stoneback) の研究³がわずかにあるだけである⁴。しかしヘミングウェイは、生涯にわたって作品中で信仰の問題を非常に頻繁に扱っており、一部の作品はほとんど宗教小説と言ってもいい内容である。宗教に関して考察される必要性は十分に認識されながら、まだ十分に研究されているとは言い難いのである。

ヘミングウェイ初期の代表的短編である「インディアン・キャンプ」は、これまで宗教と関連づけて論じられることは皆無に等しかったが、ここではこの作品の隠された宗教性に着目し、従来とはまったく異なる解釈を試みる。まず始めに出版された作品から削除された部分をあわせて見ることで、後のニック・アダムズ物語にも受け継がれていくニックの闇への恐怖の原因が、実は宗教の問題と深く関わっていることを明らかにする。続いてそのような宗教的問題を生んだヘミングウェイの家庭環境を詳しく見ていく。ヘミングウェイ家では、母親の楽天的な自由主義神学と、父親の厳格な正統派ピューリタニズムとが併存していたのである。そしてこのふたつの宗教の混在が削除された原稿では重要な意味を帯びていることを明らかにし、その結果、実は当初、「インディアン・キャンプ」はニックが宗教的な恐怖を克服する物語として書かれていたことを暴き出す。

1. 恐怖の引き金

「インディアン・キャンプ」には本来タイプ原稿で約8ページにわたる導入部分があったが、発表直前に削除された。この断片は死後に「三発の銃声」(“Three Shots,” 1972) というタイトルでフィリップ・ヤング編集の『ニック・アダムズ物語』(*The Nick Adams Stories*, 1972) に収録される。「三発の銃声」のあらすじは以下の通りである。父親と叔父のジョージと3人で森にキャンプにやってきた主人公のニックは、夜釣りに出かける父親とジョージおじさんを送り出して、ひとりでテントで眠ることになる。父親は出発するとき、もし何

かあったらライフルを三発撃てばすぐに戻ってくると約束する。テントでひとり眠ろうとすると、ニックは急に森の暗闇が恐ろしくなってくる。恐怖に耐えられなくなったニックは、ついにライフルを三発撃って父親たちを呼び戻す。父親もジョージも、ニックがたんに臆病なためにライフルを撃っただけであるのには気づいていたが、約束通り釣りをあきらめて戻ってくる。ちょうどそこに付近のネイティヴ・アメリカンの集落からの使いがあり、出産の手助けをしてやらなければならない。父親は前夜のようにニックをテントに残しておけなかったで、一緒につれていくことにした、というところで「インディアン・キャンプ」本編へと接続する。

まず最初に物語を動かすきっかけになるニックの恐怖を見てみたい。

Walking back through the woods Nick began to be frightened. He was always a little frightened of the woods at night. He opened the flap of the tent and undressed and lay very quietly between the blankets in the dark. The fire was burned down to a bed of coals outside. Nick lay still and tried to go to sleep. There was no noise anywhere. Nick felt if he could only hear a fox bark or an owl or anything he would be all right. He was not afraid of anything definite as yet. But he was getting very afraid. Then suddenly he was afraid of dying. Just a few weeks before at home, in church, they had sung a hymn, "Some day the silver cord will break." While they were singing the hymn Nick had realized that some day he must die. It made him feel quite sick. It was the first time he had ever realized that he himself would have to die sometime. (*NAS* 13-14)

ニックは夜の森を恐れている。たき火の火は消え、おそらくあたりは完全に暗闇に包まれている。「何かはつきりとしたものには恐怖を感じない」と述べて

いることから、暗闇に潜む、未知のものをニックは恐れているらしい。そしてその未知のものの究極が、自らの「死」であり、ニックはつい最近、自分が死ぬ可能性にはじめて気づいたというのである。ニックの中で、森の暗闇は自らの死の可能性と結びつき、恐怖を増幅させる。この後、教会から自宅に帰っても暗闇は死と結びつき、ニックをおびえさせることが描かれる。自分の部屋で眠ることができず、ニックは玄関の常夜灯で本を読むことで、朝までの時間をつぶすのである。このような、ニックの死への恐怖、夜の闇への恐怖、それに伴って生じる不眠症というモチーフは、後のニック・アダムズを主人公とした一連の短編小説に非常に頻繁に見られるものである。しかし「三発の銃声」で描かれる恐怖は、これ以降の短編とは決定的に異なっている。後のニック・アダムズ物語で描かれる恐怖は、戦場での負傷が原因とされているが、「三発の銃声」の場合は、若いニックの恐怖は戦争とは何のかかわりもないのである。まだ戦争に行ったことのない若いニックが、戦場での負傷兵ニックと似た恐怖に捕らわれていることは非常に重要である。従来は当然のように、ニック・アダムズ物語に一貫して現れる闇への恐怖は、戦争後遺症によるものと解釈されてきたからである。

また、もうひとつ非常に興味深いのが、ニックの恐怖の引き金を引いたのが教会での賛美歌であることである。ここでニックの夜の闇への恐怖を考えてみる際に、従来の研究のように第一次世界大戦での負傷だけを原因とするのではなく、ヘミングウェイの経験した宗教をもう少し詳しく考えてみる必要があるのではないだろうか。

2. オークパークの光と闇

これまでのヘミングウェイ研究の常識では、ヘミングウェイは故郷オークパークの宗教に反発していたと考えられてきた。たとえばスコット・ドナルドソン (Scott Donaldson) は「[アーネストの] 幼少期の教育は、世の中がバラ色をしているかのように教え込んだ。しかしそのようなものの見方は、身のまわりのあらゆるところで出会う、現代の生活の野蛮さとは一致しなかった。

特に第一次世界大戦は、アーネストがオークパークの宗教にはっきりと幻滅するきっかけとなったのである」(224)と述べている。ヘミングウェイは第一次世界大戦を経験した結果、故郷の宗教の説く楽天的な世界観がもはや通用しないのだということに気づき、その宗教観に反発したのだというのである。しかし、この見解には大きな問題がある。なぜならオークパーク時代のヘミングウェイを取り巻く宗教的環境は、必ずしも一枚岩ではなかったからである。

ラリー・グライムズは当時のオークパークの宗教的状况を綿密に調べ、町の大多数の人たちの信仰する宗教を「自由主義神学とヴィクトリア朝的道德観とセンチメンタルな敬虔さの雑多な寄せ集め」(“Religious Odyssey” 37)であるとまとめている。そしてオークパークの宗教の根幹をなす自由主義神学を以下のように説明している。

〔オークパークの抱く〕神話の本質は、人間が無垢であるという認識であり、健全な精神であり、社会の進歩であり、楽天主義である。これらはみな自由主義神学の特徴である。(中略)ある信者は「もし誰もがずっとオークパークに住み続けていれば、『人生は生きるに値するか』という質問には簡単に答えられるだろうし、『伝道の書』が書かれることもなかっただろう」と主張している。(“Religious Odyssey” 37)

確かにヘミングウェイは、このような楽天的な宗教観には非常に批判的であった。たとえば「インディアン・キャンプ」に続く短編「医者とその妻」(“The Doctor and the Doctor’s Wife,” 1925)では、ニックの母親がこういった自由主義神学以上に進歩的なクリスチャン・サイエンスに傾倒している⁵ことが描かれるが、ニックは物語の最後で母親ではなく、父親を選択してふたりで森へと向かう。またニック物語以外でも、オークパークではなくオクラホマに舞台を設定されているものの、初期の短編「兵士の故郷」(“Soldier’s Home,” 1925)で涙を流しながら息子をひざまずかせ、神に祈ることを強要する母親の姿がセンチメンタルなオークパークの宗教を描いたものであることは明らか

である。つまりオークパークの自由主義神学は、ヘミングウェイ作品では母親に代表されているのである。そして実際ヘミングウェイの母グレース（Grace Hall Hemingway）も、このようなセンチメンタルで「健全な」信仰を持っていたことが知られている（Grimes, “Religious Odyssey” 44）。これまでヘミングウェイは故郷オークパークの宗教に反発していたと解釈されてきたが、ヘミングウェイが反発していたのは、こういったセンチメンタルな信仰心であり、母親の宗教なのである。

その一方でヘミングウェイの父親はこのような自由主義神学を信仰してはいなかった。楽天的で人間の善を信じるグレースとは違って、父クラレンス（Clarence Edmonds Hemingway）は非常に厳格な宗教的規律で子供たちをしつけていた。その厳格さは、これまでヘミングウェイ研究者が考えていた以上に激しいものであったようである。モリス・バスク（Morris Buske）は、ヘミングウェイの一歳年上の姉マーセリーン（Marcelline Hemingway Sanford）が書いた伝記から、出版の際に削除された原稿を検証し、これまで知られていなかった父クラレンスの家庭内での姿を暴き出している。クラレンスはしばしば子供たちに暴力的に体罰を加え、自分が悪いとみなしたことをすると、急に性格が変貌し、手や革紐で子供たちを何度も叩いた。

折に触れ、私たちが幼かった頃はほとんど何をしても叩かれていたような気がする。なぜ叩かれるのか説明されることはなかったし、私たちのことを理解しようともしてくれなかったし、私の見たところ、なぜ私たちがそんなことをしたのか分かろうと努力してくれているようには思えなかった。（中略）両親や召使いが行儀が悪いと考えることを私たちがしてしまったら — 彼らの考える悪いことを私たちがしたら、私たちは叩かれたし、どうしてそんなことをしたのか尋ねられることもなかった。よく覚えているのだけれど、お母さんとお父さんが旅行でいなかったときなど、帰ってくる日になって、子守の女の子やコックや私たちの世話をすることになった人たちに「私いい子だったよね？ いい子だったって報告してもいい

いよね？」とよく聞いたものだった。なぜなら悪い子でした、行儀がよくありませんでした、言うことを聞きませんでした、と報告する羽目になったら、あるいは両親が家に入ってきて「アーネストはいい子だったかい？ マーセリーンのお行儀はよかった？」と聞いたとき、メイドが「実は時々ちょっと行儀の悪いときもありました。たまに私の言うとおりにしようとしなかったんです」などと答えたら、それ以上一言も喋らずに、ただ私たちはお父さんの診察室に連れて行かれ、膝に載せられてさんざんに叩かれることになったからだ。手で叩かれることもあったし、定規で叩かれることもあったし、剃刀の研ぎ皮で叩かれることもあった。(qtd. in Buske 75-76)

ここには子供たちが父親の体罰をひどく恐れていたことが表れている。両親が不在のとき、子供たちは体罰を受けるのがあまりにも恐ろしく、両親が帰ってくる前に子守の女性や料理人に言いつけないようお願いしなければならなかった。そしてそのような体罰が終わった後、「いつもひざまずいて神に許しを請うよう命じられた」(Sanford 31) というのである。まだ幼い妹のサニー(Madelaine “Sunny” Hemingway) があまりにもひどく体罰を加えられるのに耐え難くなり、マーセリーンが必死に父からサニーを守ろうとする記述も印象的である。結局マーセリーンも父親に殴られた後、部屋を追い出され、「[そのときのサニーの] 悲鳴は(それまでにお父さんは本当に激しく怒り狂っていたので) 決して忘れられないものとなった」(qtd. in Buske 77) と語られる。ヘミングウェイ家は、しばしば叩かれた子供の悲鳴が鳴り響く家庭であったのである。

このようなクラレンスの信仰をグライムズは以下のように説明している。

父 [アンソン、ヘミングウェイの祖父] の感化のもとで得た若い頃の宗教的経験はクラレンスに強い影響を残し、そのせいでクラレンスは人間の罪と過ちをはなはだしく意識するようになり、憂鬱で厳格で生真面目な道徳

家に育った。クラレンスの宗教的気質は、心理学的には強度の鬱病と判断してもよいものであったが、同時代の最も偉大な心理学者ウィリアム・ジェイムズは、クラレンスのような性格の人物を宗教的な言葉遣いで捉えている。そういった人物は病んだ魂に蝕まれているのである、と。ジェイムズの理解によると、健全な精神を持つ新しい自由主義的で進歩的な神学がアメリカで広まりつつあるのだが、かつての正統派のアメリカのプロテスタンティズムもまだ、ジェイムズが「病んだ魂の宗教」と名づけたものを伝え広めようとしていたのである。この古い正統派の核心にあるのは、墮罪の教義であり、その恐ろしい結果として人類に与えられた死刑宣告であった。ジェイムズの議論によると、この暗澹たる正統派神学は「伝道の書」の宿命論と自然神学に酷似していた。（“Religious Odyssey” 47）

ここで明らかなように、父親の信仰は先ほど見た「伝道の書」の世界観を否定する母親の自由主義神学とは全く異なったものである。『日はまた昇る』のタイトルとエピグラフに「伝道の書」の一節を用い、短編「清潔で明るい場所」で「伝道の書」の虚無主義のエコーを響かせるヘミングウェイは、母親のセンチメンタルな信仰ではなく、「伝道の書」の世界観を神学的よりどころとするクラレンスの宗教観をある程度受け継いでいると言えるだろう。

ヘミングウェイが母親の宗教よりも父親の宗教の方に親近感を覚えていたことは「インディアン・キャンプ」の続編とも言える「医者とその妻」においても明らかである。この作品には楽天的な明るい信仰を持つ母と、ジェイムズが「病んだ魂の宗教」と呼んだ信仰を持つヘンリー・アダムズ医師の暗い心の闇が明確に対比されているからである。医者妻はクリスチャン・サイエンスに傾倒しているが、クリスチャン・サイエンスとは、神についての真の知識を得れば、物質的な薬や治療を行わなくても病は治るとする宗教であり、医者妻がこの宗教を信じていること自体が非常に皮肉な状況であるといえるだろう。

たった今、ネイティヴ・アメリカンのディック・ボウルトンとのいさかいでやり込められ、怒りに震えるアダムズ医師は、自分の部屋で銃の手入れをして

怒りを静めようとしている。妻は頭痛がすると言って、隣の部屋をブラインドで閉め切って暗くし、ベッドに横たわっている。

“Henry,” his wife called. Then paused a moment. “Henry!”

“Yes,” the doctor said.

“You didn’t say anything to Boulton to anger him, did you?”

“No,” said the doctor.

“What was the trouble about, dear?”

“Nothing much.”

“Tell me, Henry. Please don’t try and keep anything from me. What was the trouble about?”

“Well, Dick owes me a lot of money for pulling his squaw through pneumonia and I guess he wanted a row so he wouldn’t have to take it out in work.”

His wife was silent. The doctor wiped his gun carefully with a rag. He pushed the shells back in against the spring of the magazine. He sat with the gun on his knees. He was very fond of it. Then he heard his wife’s voice from the darkened room.

“Dear, I don’t think, I really don’t think that any one would really do a thing like that.”

“No?” the doctor said.

“No. I can’t really believe that any one would do a thing of that sort intentionally.” (*NAS* 25-26)

会話自体に、妻が夫に対して優位な立場にあるらしいことが見て取れる。夫は妻に、ディック・ボウルトンが治療費を踏み倒すためにけんかをふっかけてきたのだと説明するが、妻は人が意図的にそのような悪意ある行動をするなど信じられないと言って、夫の意見を否定する。ここで人間に悪意があることを信

じようとしなない妻の姿と、世の中に悪が存在することを知っている夫の姿との対比が非常に鮮明に描かれている。ここには先ほどまで見てきたヘミングウェイ家でのふたつの宗教観がはっきりと表れていると言えるだろう。楽天的でセンチメンタルな自由主義神学は人間の悪を否定するが、虚無的で「病んだ魂」の宗教はこの世に悪が存在することをはっきりと知っている。

この作品には、表面的には暗い部屋にとどまる妻と、物語の最後で明るい森へと向かう夫との、光と闇の対比が描かれているが、実際に人間の悪意を知る闇を心に抱えているのは夫の方なのである。光と闇の二重の対比の中に塗り込められるアダムズ医師の心の闇は、先ほどのグライムズの引用に現れる、ウィリアム・ジェームズ（William James）の言う「病んだ魂の宗教」を体現しているのである。

「医者とその妻」の結末部分でニックは母よりも父を選択することが描かれるが、この数年後に書かれた短編「父と子」(“Fathers and Sons,” 1933) では、体罰を加える厳格な父親を恐れながらも、その父親に対して愛情を持ち続けるという、ニックの矛盾した感情が描かれる。

Nick loved his father but hated the smell of him and once when he had to wear a suit of his father's underwear that had gotten too small for his father it made him feel sick and he took it off and put it under two stones in the creek and said that he had lost it. He had told his father how it was when his father had made him put it on but his father had said it was freshly washed. It had been, too. When Nick had asked him to smell of it his father sniffed at it indignantly and said that it was clean and fresh. When Nick came home from fishing without it and said he lost it he was whipped for lying.

Afterward he had sat inside the woodshed with the door open, his shotgun loaded and cocked, looking across at his father sitting on

the screen porch reading the paper, and thought, "I can blow him to hell. I can kill him." Finally he felt his anger go out of him and he felt a little sick about it being the gun that his father had given him. (NAS 265)

ここでニックは、父親は好きなものの父親のにおいには耐えられず、父親からのお下りのシャツを森に捨てて帰るのである。ニックはシャツを捨ててきたことで父親にむち打たれるが、その怒りからニックはこっそりとライフルで父に狙いをつける。父親を撃ち殺すことができるのだ、と考えて満足するのだが、やがてそのライフルを父にもらったことを思い出し、気分が悪くなる。ここには父親に対する愛情と、父親の体罰に対する怒りとの、矛盾する感情にニックが捕らわれていることが表れている。この引用箇所以外でも頻繁に描かれるように、ニックはアウトドア活動の手ほどきをしてくれた父に対して愛情を感じている。その反面、父親の一部の側面には反発を覚えており、とりわけ父親の体罰に対しては、たとえ空想上のことにせよ、殺すことを考えるほど激しい憎しみを抱いているのである。

ヘミングウェイもニックと同様、恐怖と愛情の混じった矛盾する感情を父親に対して抱いていたらしいが、ちょうどこれらニック・アダムズ物語で描かれるミシガン時代に、ヘミングウェイの父親は徐々に鬱病的傾向を強めていく。息子が最も父親を必要としていた時期に、父は一家の夏の間の避暑地であるミシガンの別荘には現れず、ひとりオークパークに残っていたのである(Reynolds 101-102)。そして息子が作家として成功して間もなく、父クラレンスの文字通り「病んだ魂」は彼を自殺へと追いやってしまうのである。

3. "Saved by Grace" と「伝道の書」

これまで見てきたように、ヘミングウェイ家では母親の楽天的な宗教観と、父親の「病んだ魂の宗教」とが併存していた。このようにまったく異なったふたつの信仰が混在していたことは、「三発の銃声」では大きな意味を帯びてく

る。ニッケの恐怖の引き金になった「いずれ銀のひもが切れるとき」という歌詞の含まれる賛美歌は、グライムズや前田が指摘しているように、有名な賛美歌作者ファニー・クロスビー (Fanny Crosby)⁶の“Saved by Grace”である。

Some day the silver cord will break
And I no more as now shall sing;
But Oh, the joy when I shall wake
Within the palace of the King!

*And I shall see Him face to face,
And tell the story—Saved by grace.*

Some day my earthly house will fall;
I cannot tell how soon 'twill be;
But this I know—my All in All
Has now a place in heav'n for me.

Some day, when fades the golden sun
Beneath the rosy tinted west,
My blessed Lord will say, “Well done!”
And I will enter into rest.

Some day; till then I'll watch and wait,
My lamp all trimmed and burning [bright],
That when my bright Savior ope's the gate,
My soul to Him may take its flight. (Bowlin 63)

この歌詞を見て明らかなように、クロスビーの賛美歌は極めてセンチメンタル

で、当時のオークパークの主流であったセンチメンタルな信仰心の典型であることが見て取れる。ここで試みられているのは、死の恐怖の緩和である。死を受容するために、死を第二の誕生であるとみなすレトリックは、キリスト教に限らずさまざまな宗教で用いられる戦略であるが、非常に皮肉なことに、死への恐怖を緩和させるための歌詞であるにもかかわらず、ニックに対してはその恐怖を緩和するどころか、むしろ逆に死への恐怖をかき立てる結果になっているのである。ではなぜ、恐怖の緩和のレトリックがニックにはうまく機能していないのだろうか。当時71歳のクロスビーにとって、死は間近に迫るものであり（実際には94歳まで生き続けるのであるが）、その死をセンチメンタルな装いで包み込み、楽観的に受容するための賛美歌を書くのは極めて自然なことと言えるだろう。つまり死の緩和のレトリックは、すでに死を意識していることが前提であり、すでにある死への恐怖を和らげることが目的なのである。それに対してそれまで死を意識することのなかったニックにとっては、この賛美歌が改めて死の可能性を教える結果にしかならないのは当然のことと言えるだろう。

しかし、ここにはそれだけではないもっと深い意味が隠されているように思える。この賛美歌を聴いた後のニックの様子を見てみたい。

That night he sat out in the hall under the night light trying to read *Robinson Crusoe* to keep his mind off the fact that some day the silver cord must break. The nurse found him there and threatened to tell his father on him if he did not go to bed. He went in to bed and as soon as the nurse was in her room came out again and read under the hall light until morning. (NAS 14)

ここでニックは銀のひもが切れるときのことから目をそらせるために、玄関の明かりのあるところで夜をやり過ごしている。そしてその直後に子守の女性に発見され、「父親に言いつける」と脅されて一度自分の部屋に戻る事が語ら

れる。もちろん子供に対しての「父親に言いつける」という脅し文句は、多くの家庭で極めてありふれたものであろう。しかしヘミングウェイ家ではこの脅し文句は特別の意味を持っていた。それはマーセリーンの自伝ですで見たとくに、父親に言いつけられることがすなわち激しい体罰を意味していたからである。もちろん「三発の銃声」でははっきりと父親への恐怖が描かれているわけではない。しかし作者ヘミングウェイの父親の体罰に対する恐れを考慮に入れると、ここで「父親に言いつけられる」ことに言及していることは示唆的である。「銀のひも」が切れることへのニックの恐怖を描きながら、そのときにヘミングウェイが幼い頃の父親の体罰への恐怖を思い起こしていたのは想像に難くないだろう。こういった伝記的事実をあわせて考えると、ここでニックは父親に体罰を加えられる危険を冒しているのであり、父親の恐怖を凌駕するほどの大きな恐怖を死に対して抱いていることになるのである。

また聖書になじみのある読者にはすぐに分かることであるが、この“Saved by Grace”という賛美歌は、「伝道の書」の一節をもとにして書かれている。

Or ever the silver cord be loosed, or the golden bowl be broken,
or the pitcher be broken at the fountain, or the wheel broken at the
cistern.

Then shall the dust return to the earth as it was: and the spirit
shall return unto God who gave it.

Vanity of vanities, saith the preacher; all is vanity” (Ecclesiastes
12: 1-8)

“Saved by Grace”と「伝道の書」のこの箇所は、どちらも人の死を描いている。「伝道の書」の場合、肉体は塵となって大地に帰り、魂は、もともとそれを与えた神のもとへと戻る。つまりすべてが無に帰るのである。しかしクロスビーの賛美歌では、同じように死を扱いながら「伝道の書」とはニュアンスがまったく異なっている。賛美歌では死後、恩寵のおかげで天上の世界に行き、

神と向かい合うことのできる幸せが歌われるのである。いわば厭世的で虚無的な「伝道の書」の世界を、自由主義神学の立場から書き直し、センチメンタルな装いを加えたものがこの賛美歌であると言えるだろう。しかしニックにはそのセンチメンタルな装いは機能せず、死の可能性のみが見えてしまうのである。つまり賛美歌のもとになった「伝道の書」の世界観を、死を恩寵としてではなく、死を虚無としてみる世界観を、覗いてしまうことになる。いわば母の楽天的な宗教を遙かにしのぐ存在感で、その背後に父親の病んだ魂の宗教が、父親の心を覆う闇が、ニックをおびやかしているのである。そういう意味で、ニックを取り囲む森の闇は、父親の抱える心の闇でもあった。ニックの死への恐怖は伝記的に再構成する限り、父親の世界観に対する恐怖に他ならないのである。

4. 恐怖の克服

「三発の銃声」に描かれたニックの恐怖をあわせて見ると、「インディアン・キャンプ」はニックのイニシエーションの物語ではなく、恐怖の克服の物語に転じる。ニックは賛美歌によって死への恐怖を引き起こされるが、結末のニックの確信で明かなように、インディアン・キャンプでの出来事を経験した結果、その恐怖が解消されるのである。賛美歌“Saved by Grace”は死と誕生とを一致させることで恐怖を和らげようとしていたが、その賛美歌の状況をそのまま再現するかのように、「インディアン・キャンプ」では文字通り死と誕生が同時に発生している。ネイティヴ・アメリカンの女性が子供を産むのとほぼ同時に夫が自殺しているという点で、誕生と死が同時に発生しているからである。しかし「インディアン・キャンプ」で描かれた状況は、センチメンタルな自由主義神学やクロスビーの賛美歌の世界とほど遠いことは明白である。恐怖を緩和するどころか、誕生そのものが極めて暴力的であり、ネイティヴ・アメリカンの夫の死も、賛美歌に歌われるような安らかな死とは遠くかけ離れたものである。

それにもかかわらず、作品の最後でニックが恐怖を克服しているように見え

るのは奇妙に思えるかもしれない。それはある意味で父親以上に「伝道の書」の世界観を深く理解したからなのである。「インディアン・キャンプ」の結末部分は以下の通りである。

They were seated in the boat, Nick in the stern, his father rowing. The sun was coming up over the hills. A bass jumped, making a circle in the water. Nick trailed his hand in the water. It felt warm in the sharp chill of the morning.

In the early morning on the lake sitting in the stern of the boat with his father rowing, he felt quite sure that he would never die. (NAS 21)

太陽が昇りつつある中、池の水に手を浸すニックは自然との限りない一体感を感じている。夜の闇に朝日が差し込む中、ニックは自然のサイクルを実感しているのである。ここでニックの「決して死なない」という確信は、ニック個人の一度きりの生命のことを言っているのではなく、もっと大きな視点から自然の循環の中に取り込まれる生命のことを言っているのである。そのような発想は、「伝道の書」の世界に通じるものである。以下の引用は、後にヘミングウェイが『日はまた昇る』のエピグラフに使った「伝道の書」の一節である。

Vanity of vanities, saith the preacher, vanity of vanities; all is vanity.

What profit hath a man of all his labour which he taketh under the sun?

One generation passeth away, and another generation cometh: but the earth abideth for ever.

The sun also ariseth, and the sun goeth down, and hasteth to his place where he arose. (Ecclesiastes 1: 4-5)

「空の空、すべては空」という言葉で始まり、人間の行為の無意味さをとく「伝道の書」は極めて虚無的で厭世的に見えるが、大地を主役として考えれば、世代が移りゆく中、大地の永続性が説かれる書でもある。3行目以降を中心に見ると、ニックの確信は、この「伝道の書」の世界観に極めて近いものであることが分かるだろう。ヘミングウェイは『日はまた昇る』の第2版が出版された際、エピグラフから上の引用の最初の2行を削除するよう、出版社に指示している。ヘミングウェイはその理由を次のように説明している。「この本のポイントは大地が永遠に続いていくことなのだ。大地には愛情とあこがれを持っているが、世代のことはそれほどでもないし、虚無 (Vanities) のことなどどうでもいいのだ。 (中略) 私はこの本を空虚で辛辣な風刺にするつもりはなく、大地が永遠に主役として存在し続ける悲劇を書きたかったのだ」(SL 229、傍点引用者)。ここでヘミングウェイが「伝道の書」を虚無的に解釈していないことは明らかである。ネイティヴ・アメリカンの父親の死と子供の誕生を目撃し、そして父親のこぐボートに乗って自然のサイクルを実感するニックは、“Saved by Grace”のように表面的ななぐさめに頼るのではなく、また父親のように心の闇に覆われるのでもなく、より深い意味で永久に存在し続ける大地の一部であることを、感覚的に学んだことを描いているのである。

「伝道の書」の世界観は、ヘミングウェイ作品全般に見られる共通した世界観であるが、前半部分が削除される以前の「インディアン・キャンプ」は、その世界観を表現した最初の作品になるはずだったのである。

結論

最終的にヘミングウェイがこの「三発の銃声」にあたる部分の原稿を削除したのは、極めて現実的な選択であったと言えるだろう。おそらく賛美歌“Saved by Grace”を、ニックの恐怖を発動させるきっかけとして選んだ時点で、ニックの恐怖の物語が、あまりにも父親をめぐる家族の問題を巻き込むことに気づいたのであろう。「父と子」で「[ニックは] 作品に書くことで多くのことを取り除いてきた。しかしそのこと [父親のこと] を書くにはまだ早すぎた。まだ

あまりにも多くの人が生きていたからだ」(NAS 259-60)と語るように、ニックにとって(おそらくヘミングウェイにとっても)、作品に描くことには一種の治療効果があった。しかしオークパーク時代の家族のことを描くと多くの人を傷つけることになるのが分かっていたために、作品化できることはきわめて限られていた。「インディアン・キャンプ」を書くときもまた、父親が存命であったために、ニックの恐怖の対象としての父親を正面から描くことはできなかったのではないだろうか。結局、宗教の問題をめぐるニックの恐怖を隠蔽することで、ヘミングウェイはこの作品を恐怖の物語から主人公のイニシエーションを描く物語に変える決断を下したのである。しかし、改めて作品から隠蔽されることになった宗教観を掘り起こし、ヘミングウェイが最初期の短編から「伝道の書」の世界観を下敷きにして作品を創作していたことを把握するのは、生涯一貫して宗教を主要なモチーフのひとつとして作品を書き続けたヘミングウェイ作品全体を理解し直す意味でも、非常に重要なことであると言えるだろう。

註

* 本稿は日本英文学会九州支部第62回大会(2009年10月24日、宮崎大学)における口頭発表を加筆修正したものである。

1 これまで伝統的にこの作品はニックのイニシエーションの物語であると捉えられてきたが、作品最後のニックの確信に対する解釈はおおむねニックのイニシエーションが失敗に終わったのだとする解釈と、成功したとする解釈のふたつに分かれる。前者の意見によれば、ひとりの人間の命が暴力的に絶たれたのを目の当たりにして、なおかつ死なないことを確信するのは現実から目をそらしているからだということになる。たとえば「非現実的で子どもっぽい」(DeFalco 32)、「希望に基づいた、自己防衛的な」(Spilka 194)、「子どもらしい幻想」(Griffin 68)などである。その一方で後者の意見によれば、ニックの死なないという確信はなんらかの条件に限定されたものであり、ニックの通過儀礼は果たされたと考えられる。たとえば「いくぶん子どもらしい非現実的な不死の感覚であるが、この主張は決意でもあるのだ。(中略)彼は自分が決して死なないだろうと決意するのだ。なぜなら自分が自殺をすることはないと確信しているからである。彼は失意の父親が死んだようには決して死なないだろう、と考えているのだ」(Monteiro 154)、「早朝に、かつ湖の上で、かつボートの船尾に腰掛けて、かつ父親が漕いでいるときにだけ、ニックは「自分

- は決して死なないだろうとすっ・か・り確信」することができるのだ」(Smith 39) などである。
- 2 ヘミングウェイのオークパーク時代の宗教的環境から初期作品を読む著書 *The Religious Design of Hemingway's Early Fiction* と、オークパークの宗教的環境を概観した短い論文 “Hemingway's Religious Odyssey: The Oak Park Years” のふたつがある。前者はヘミングウェイの文学理論の「第五次元」を宗教観から説明するものであるが、後者の研究は、新聞などに採録されたオークパークの牧師の説教などから町の宗教的状况を再構成する非常に重要な研究であり、本論文もこの研究を大きな土台として参照している。
 - 3 ストーンバックの研究は残念ながら、まだ著書の形でまとめられていないが、主にヘミングウェイのカトリシズムを中心にして作品の読み直しを図っている。従来ヘミングウェイのカトリック改宗は、ハドリー (Hadley Richardson) と離婚してカトリック教徒のポーリーン (Pauline Pfeiffer) と結婚をするための「名目上」のものであると考えるのが定説であったが、ポーリーンと出会うより以前からヘミングウェイがカトリックに興味を持っていたことを明らかにした “In the Nominal Country of the Bogus: Hemingway's Catholicism and the Biographies” を始めとして、非常に重要な論文を数多く発表している。
 - 4 これら以前にも宗教を扱った研究がなかったわけではなかった。ジュランヌ・イザベル (Julanne Isabelle) の *Hemingway's Religious Experience* が事実上唯一の研究と言えるが、この本は事実関係に誤りも多く、内容に関しては必ずしも信用できない。
 - 5 グレイスはクリスチャン・サイエンスに入信していたわけではなかったが、スピリチュアリズムに傾倒しており、手紙などでクリスチャン・サイエンスにも興味を示している。しかし「医者とその妻」とは違って、実際のグレイスは夫にはばかって、夫の死後までスピリチュアリズムにあからさまに没頭することは控えていた (Reynolds 131-32)。
 - 6 クロスビーは盲目の女性で、生涯に8000以上の賛美歌を書いたベストセラー作家である。クロスビーが “Saved by Grace” を初めて一般に披露して歌ったのは当時著名な牧師であったD・L・ムーディ (D. L. Moody) の会合に出席したときだった。クロスビーが聴衆に混じっていることを知った人が、彼女に何か歌ってくれるようせがんだのである。この牧師ムーディは、当時著名な福音主義者でヘミングウェイの祖父アンソン・タイラー・ヘミングウェイの知人であった (Donaldson 222)。

Works Cited

- Bowlin, William R., ed. *A Book of Personal Poems*. Miami: Granger, 1977.
- Buske, Morris. “Hemingway Faces God.” *The Hemingway Review* 22.1 (Fall 2002): 72-87.
- DeFalco, Joseph. *The Hero in Hemingway's Short Stories*. Pittsburgh: U of Pittsburgh P,

- 1963.
- Donaldson, Scott. *By Force of Will: The Life and Works of Ernest Hemingway*. NY: Viking, 1977.
- Griffin, Peter. *Less Than a Treason: Hemingway in Paris*. NY: Oxford UP, 1990.
- Grimes, Larry E. *The Religious Design of Hemingway's Early Fiction*. Ann Arbor: UMI, 1985.
- . “Hemingway's Religious Odyssey: The Oak Park Years.” *Ernest Hemingway: The Oak Park Legacy*. Ed. James Nagel. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996. 37-58.
- Hemingway, Ernest. *Ernest Hemingway: Selected Letters, 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. NY: Scribner's, 1982.
- . *The Nick Adams Stories*. Ed. Philip Young. NY: Scribner's, 1972.
- Isabelle, Julianne. *Hemingway's Religious Experience*. NY: Vantage, 1964.
- Monteiro, George. “The Limits of Professionalism: A Sociological Approach to Faulkner, Fitzgerald and Hemingway.” *Criticism: A Quarterly for Literature and the Arts* 15.2 (Spring 1973): 145-55.
- Reynolds, Michael. *The Young Hemingway*. NY: Norton, 1998.
- Sanford, Marcelline Hemingway. *At the Hemingways*. Moscow: U of Idaho P, 1999.
- Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston: G. K. Hall, 1989.
- Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. Lincoln: U of Nebraska P, 1995.
- Stoneback, H. R. “In the Nominal Country of the Bogus: Hemingway's Catholicism and the Biographies.” *Hemingway: Essays of Reassessment*. Ed. Frank Scafella. NY: Oxford UP, 1991. 105-40.
- 前田一平「「三発の銃声」に隠された不安の源——「あいのこ」と「銀のひも」」『ヘミングウェイの時代——短編小説を読む』日下洋右編著（彩流社、1999年）45-75頁